

末黒野

すぐろの

5月号

(通巻885号)



早春

懸り羽子月照らしみて鳥のごと
亀の首伸びきつてゐる春立つ日
早春の賑はふ音や鉄工所
御神籤を見せ合うてをり受験生
白梅の古木枝張り武家屋敷
咲き満ちて白を極めぬ梅の花
鐘撞いて僧の下りくる春浅し
鼻擦りて犬の寄りたる董かな
春の鴨明日を約する茜空
屋根替の眉ゆたかなる漢かな
紅椿落ちて悔なき彩もてる
一月悼友田悠子さんの特選句はや天国へ

黒滝志麻子
(主宰)

風光る

天神の深き裏山梅探る
寒晴や野球コートの声通り
寺町の暮色に溶けて帰り花
待春や汀に揺るる舫ひ舟
弓なりの渚の綺羅や春隣
金文字の光る山号鬼やらひ
立春や楠に鳥語のしきりなる
背番号の並ぶ校庭風光る
春潮や船軋みたる船溜り
白梅の枝垂れ灯影の花頭窓
向き向きの春の鷗や巡視船
水琴窟の音の重なり冴返る

森清堯
(副主宰)

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

芽吹き

森清信子

水一平線滾る日の出や漁始
群青の海真向ひやどんどの火
ひそやかなるくれなゐの息寒椿
怖いもの知らずの白寿薬喰
骨と化す櫻大樹や寒日和
白梅や創刊知らぬ人ばかり
せせらぎのころがる広野露のたう
枝先へ挙る芽吹きの方かな
墨堤の日に腰下ろし蓬餅
菜の花や小流れ伝ひ畦づたひ

寒雀

岡野里子

菊炭の匂ふ床の間釜始
雪吊の揺るぎなき縄松の声
林泉の千歳の松や菰巻きて
陽光を集めて丸し寒雀
内堀の石垣の隙冬すみれ
寒雀俄日和の地に弾み
寒雀はつかの日差し啄ばみて
只中の光る一川大枯野
ねず色の遠山丘の水仙花
白梅や男結びの四目垣

寒牡丹

石黒興平

着せ藁におさまりきらず寒牡丹
寒牡丹見頃てふこと欺かず
力無き午後の日ざしや寒牡丹
小面のふと息遣ひ冬座敷
騎手帽の上下に弾み冬木立
青シート敷けば舞台や里神楽
待春のバギー双子の深眠り
冬の月の白きをかすめ飛行灯
銀鼠の高層ビルや寒の月
いろり端占めて地酒とあたりめと

枇杷の花

菅野日出子

枯れてなほ異彩はなつや大銀杏
枯櫂の樹齢百年瘤あまた
花八手日差しわづかに裏鬼門
禅林の臘梅とかす日差しかな
名ばかりの寺尾城址や枯尾花
藁苞をはみ出す紅や冬牡丹
ひつそりと生きて卒寿や枇杷の花
小面の憂ひかすかや月朧
春くや寺の大樹に巢鳥鳴く
穢れなき春暁の空月淡し



南白亀川

田中臥石

届きたる蔵王嵐の凍み豆腐
朝粥をり窓透く寒雀
恋猫のロックンロールで通りけり
旧暦の立春は未だふきのたう
二ん月の雨や石塚友二の忌
友二忌の雨の建長寺を憶ふ
ふるさとの地酒の旨し木の芽和
麗らかや波郷詠みたる南白亀川
迎春花波郷追慕の南白亀川
膝病みて足を投げだす春炬燵



乙矢集

配列は音順(当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ)



迎春花

岡田史女

夕星や裸木一本づつ昏るる
みぞるるや病名坐骨神経痛
湯治場に訛とび交ふ四温かな
磴道は六百段や笹子鳴く
タンバリンの音の洩れくる春隣
千体の水子地藏や迎春花
祈願寺の卍の紋や梅真白

けもの道

小田嶋野笛

しんがりの居残る茶屋や梅探る
三代日の杜氏は女丈夫手足荒れ
寒禽の峙しづもる落暉かな
薪ついで雪眼のをとこ山言葉
くら谷へまたぎ一人来けもの道
吊橋を音無く渡りさつを行く
この谷の名を誰も知らず鳴鳥狩

垂り雪

加藤静汀

黒竹の細きしなりや垂り雪
寒椿不動の滝の細りをり
八つ橋の乾ききつたり寒土用
雪吊りの梅花結びや鳥の声
天を突く銀光り冬木の芽
黄昏るる枯野の果てや富士黒く
霜柱足跡深き屋敷跡

草の餅

齊藤マキ子

仕来りの鰯の雑煮や潮の香
松過ぎの出張らしき鞆かな
寒行の尼僧の笠や暮れの雨
冬帽や風へ漕ぎ出す三輪車
八十路には八十路の立志水仙花
春耕のひとりに豊かなる日差し
草の餅語尾に残れる国訛

梅の里

堺 昌子

母郷は雪積む頃よ夕鳥
谷を埋め岡を越えをり野水仙
早咲きの枝垂れは見頃梅の里
梅が香や人に集まる魚の数
山葵田の段々畑や朝晴れて
唐門の開け放たれて地虫出づ
池の面を風と滑りぬ春落葉

早春賦

高木邦雄

終電の過ぐるホームや月氷り
春浅しつい口遊ぶ早春賦
薄氷の飛ぶには齡とり過ぎて
初蝶来園児の列のはや乱れ
隧道を抜くる江ノ電春夕焼
春一番絵馬カラカラと一の宮
夕厨一輪挿しの梅香り

臥竜梅

今村千年

揺れながら暮色となりぬ枯野原
鷹飛翔五十句作る力欲し
病窓のまぢかに学窓春まぢか
日脚伸ぶ妻は朝より出でしまま
舫ひ舟揺れて梅が香漂へり
八十路には八十路の矜持臥竜梅
近づくと見せて遠のく黄蝶かな

冬の旅

及川照子

息止めて押印したる寒夜かな
晴天を占むる蔵王の樹氷かな
凍滝の凍て極めたる蒼さかな
雪嶺の景美しき車窓かな
つなぐ手を夕闇かくす冬の海
落日の黄金の川面浮寝鳥
子の助言うれしく受けて木の葉髪

春 禽

大川暉美

探梅や小川は軽き音紡ぎ
曲りたる梁の艶梢明り
寒落暉列車の窓を溢れけり
九九言ひて下校の子らや日脚伸ぶ
夕付くや子の声透る鬼は外
朝の雨うすらひ消えてしまひけり
春禽の声や前山膨らみて



青炎集

黒滝志麻子選



平塚 尾崎千代一

閑取を見に行く寺や鬼やらひ
春立つや発つ日数ふる島の旅
草萌ゆる巻き攻め跡の墓苑かな
蓄佳き盆梅買や市の空
釣り糸を切る大鯉や春めいて
役終ふる指人形や春炬燵

横浜 布施由岐子

一山を一瞬に消し雪しまき
山眠るその山にあて眠られず
雪原に樹々の影伸び山明くる
白檜曾や雪の重さをしなやかに
霧氷解くダイヤのきらの下山道
またともに季譜を探さむ冬銀河

横浜 鍋島武彦

銭湯の庭の石組花八手
地震らし朝餉の膳の寒卵
春眠やまだ覚めやらぬ両隣
野を奔る伊吹嵐や古戦場
懐手指に財布を弄び
種袋振りて夢馳す花咲く日

横浜 山咲和雄

考へることをやめたり日向ぼこ
雪予報はづれてうれし四温晴
診断は加齢と言はれ冬籠
探梅へ足のおとろへ登る坂
守り札あるだけ下げて受験生
春浅し白波の立つ駿河湾

相模原 板谷俊武

冬鳥の貧る群やピラカンサ
真つ新の絵馬打つ風や初旭
角打ちの漢寡黙や寒昂
冠雪の見る間に嵩む鬼瓦
枅酒の枅の務むる福は内
雉鳩の声のくぐもる余寒かな

横浜 片岡さかえ

恵方より待人来たり賑やかに
臘梅や風の連れ来る香に酔へる
寒月や研ぎ澄まさるる心地して
待春の窓を磨くや空青き
三年振り句友親しく春立つ日
山里にも塾の看板返る

横浜 和田慈子

ロールキャベツ仕込む大鍋凍つる夜
熟考の末のオーダー菓喰
噴き上ぐる水のためらひ春浅き
梅早し襦袢を替ふる父若き
切株の上の盆梅朝の日矢
子らの字のはみ出す勢ひ風光る

横浜 加藤タミ

寝食をいとふ杜氏や冬昂
袋田の僅かに凍る滝を兎に
探梅やパレットに溶く空の色
リズムカルに水音軽し春の川
絶叫マシン年をごまかす梅屋敷
春の朝樞にあてたる聴診器

横浜 佐藤喬風

手袋に十指あづくる安堵かな
主待つ馬の睫毛に春の雪
岬端に鷗の群れや風光る
川底の少し緩みぬ春の水
犬の曳く散歩の道や路の臺
薄氷を胸で分けゆく鴨の二羽

横浜 高橋正江

息災を励まし合へり初句会
鏡割汁粉の甘み控へ目に
竹林に斜めの日影寒雀
藁苞の中の温もり寒牡丹
祠ある旧家の庭や午祭
受験子の小さき闘志の朝かな

耕 土 集

森清 堯選



港きて火点し頃や春隣

軽やかに屋根上る猫冬終る

恋猫の動草なるか鼻の傷

円かなる白き蕾や梅の宿

カーテンの日の斑の踊りシクラメン

横浜 大内 由紀

仙台 守谷 紀栄

友待つや斜めに被る冬帽子
足元へそつと夫への湯婆かな

猫たちの占領したる炬燵かな

お互ひの傘寿祝ひぬ年始め

何もかも値上がりづくめ年始め

横須賀 久保守真佐子

横浜 宮崎他異雅

限りあるものの命や落椿
藪巻の松や古刹の心字池

推し難き電話の声音受験の子

鳥過ぐる気配を背に春障子

菜の花や三方海の吾妻山

おでん煮るひと日雨音聞くばかり

若人の著き足跡雪の原

立春や押し揃ひて太極拳

盛る皿の余白も馳走春の膳

雨降れば雨に色増し露の臺

横浜 与田 幸江

横浜 平田 きみ

読み聞かせの重き子膝に春近し
初雪やバス待つ児らの笑ひ声

天井につと現るる冬の蠅

春日差プールサイドの声響き

日光の連なる峰や春の土手